

編集後記

二〇二〇年の日本列島を

新型コロナウイルスが

襲った。この編集後記を書いている年末、収束の気配も、見通しも立っておらず、東京都における新規感染発覚件数は、一日一三〇〇人を超え、さらに勢いを増している。未曾有の原発三基メルトダウンという危機において、放射能汚染を軽々と「The situation is under control」などといつて五輪を招致した前首相の手腕なら、ウイルス感染をコントロール下におくのは朝飯前たると思っていたが、そうならなかったのは不思議である云々。

一方、前政権を引き継いだ秋田出身の苦勞人にして、パンケーキ大好きおじさんが率いる現内閣では、コロナ収束後に行うと閣議決定していたGoToキャンペーンを強行に前倒ししたものの、感染拡大で中止に追い込まれた。「経済を回せ！」という意図で見切り発車しちゃったけれど、混乱を招き、逆に経済が回らない結果となった。

政治的判断とはなにか？

イギリスには、「われわれは道徳堅固でトラファルガーの海戦に負けるネルソンをもつよりは、ハミルトン夫人と姦通をしても、トラファルガーの海戦に勝つ將軍をもつ方が幸福である」という諺があるらしい。らしい、というのは、英語の原文を見付けることができず、丸山眞男の「政治的判断」からの孫引きだからである。

この諺は、たとえば、第二次大戦のときに、対ナチ戦争を勝ち抜くため、チャーチルを指導者にかついだ政治的風土につながっている。

政治から道徳を切り離して、現実を冷徹に見極めて政治判断を下す。政治判断の結果は、よかれと思つて始めた主観的の誠意だのからは説明できない。よつて、「政治的な責任」というものは徹頭徹尾結果責任」であり、「行動の意図・動機にかかわらず、その結果に対して責任を負わなければならない」（丸山「政治的判

断）わけである。

混乱を招いた結果責任は「不徳のいたすところ」やら、「秘書ガール」やらといった言い訳では果たすことができない。永田町には政治責任の結果責任を担う覚悟で、冷徹な判断を下す政治家があまりにも少ないようにみえる。

※ ※ ※

当書物研究会もコロナ禍の影響を大きく受けている。年に二度ほど行われていた地方での大会は中止となり、規模を縮小して広島県は江古田での調査が実施された。一橋大学佐野書院で行われていた例会は、Zoomでのリモート研究会に切り替わった。また、書物研の呼びかけ人の軍師が、歴史学研究会委員長でもあり、例年、五月に行われている歴研大会が延期され、一二月となった煽りで、書物研一二月例会はなくなった。

研究会の後に、ダイモで行われる恒例の懇親会も、リモート飲み会に変更となった。そもそも、リモートになれば、遠

隔地から国立市へ移動しなくてもよいわけ、私の参加回数が増えていいはずなのだが、いまのところ満足に一度も参加できていないのは不思議の二つ目である。そういえば、ダイモは大丈夫なのか？と心配になった。ダイモのツイッターが開設されており、近況がわかるので、ホツとした次第である。

前二五号の刊行が遅れてしまったこともある。初の一月刊行となった。ひとつには私の眼力や体力が衰えて、編集がもたつき出していることがある。もうひとつは、印刷所がコロナシフトで、工場の出勤人数を半分にしたため、ゲラ

の出が遅延したということがある。

二五号を刊行したとたんに、二六号の原稿が入稿されてきたので、文字通り数珠つなぎの編集作業である。

二五号の巻頭論文は「近世史料にみるオーロラと人々の意識」である。

軍師「オツガワくん、オーロラの図版があるんだけど、カラーだといいたければ

ど、無理かなー？」

兵隊「なるへそ。カラー図版じゃないと訳がわからないですよね」

つてんで、創刊号から印刷してもらっている株式会社コームラの担当者と一緒にしてみると、

鴻コームラ村窓口「カラーを見開き二頁に収めると印刷費を安く抑えられます！」

そして、無事に、本誌最初で最後？の巻頭カラー入り論文は成った。この論文の編集作業のときに、口ずさんでいた歌が、小林旭の♪北帰行♪であったことはいうまでもない。

遅延！といえば、書物研の歴代幹事の二人がコロナ禍に書物出版したと風の噂で聞いた。コロナの影響で郵便事情が悪く遅延でもしているのだろうか、私の手元には未だ届かない。書物出版しても届かないようでは、社会変容できないじゃん。コロナめ。もうそろそろ届く頃ナ？

※ 閑話 ※ 休憩 ※
「美しいオーロラ」というのは現代人の

感覚のようである。過去に現代感覚を生な形で持ち込むと、過去が見えなくなるのは改めてことわるまでもない。論文で引かれている、尾張藩士の高力種信猿猴庵の『猿猴庵随観図会』によれば、オーロラ出現により、屋根に水を撒いたり、神仏に祈ったり、念仏を唱えた人々がいたという。瑞兆ではなく、天変の凶兆のようにとらえられたようである。

私「ミッチー先生、猿猴庵「図会」つて絵から糸偏が取れちゃってます！」

青木美智男「あのな、オガワ。その場に行かなくても図で会えるつてことなんだよ。図で会う。分つかるか？オガワ」

ここでちよいと気になってくるのは、明和七年（一七七〇）に、千年の都平安京に出現したオーロラである。

黒田日出男の『王の身体 王の肖像』によれば、日食・月食という天変を穢れとしてとらえ、その際に天皇を穢れから守るために、御所が筵で包まれ、加持祈禱が行われたという。

もちろん、赤オーロラ気と日食・月食は異

なる。日食・月食は予測可能である。予測可能だから、前もって御所を包み隠すことができるわけだ。さればこそ、宣明暦が日食・月食の予測を外すようになり、貞享暦がつくられた。

「七月二八日のオーロラ」を記録した公家は野宮定晴・広橋兼胤・土御門泰邦とある。このうち、泰邦は陰陽師頭であり、彗星を疫病・旱・洪水などと同列、つまり凶兆と捉えている。また、野宮家は武家伝奏・議奏を務める家柄で、定晴は権中納言従二位となる高位の公家である。

定晴は彗星が公家社会に不安をもたらしたとする一方で、民間社会では「稲星」とよばれ、豊作の瑞兆として捉えられたと記しているという（杉岳志「書物とフオークロア」『一橋論叢』一二四―四）。

平安京にオーロラが出現した明和七年（一七七〇）といえば、幕末維新に朝幕関係が逆転していくひとつの転換期にあっている。

※ ※ ※

「天子より諸臣一統に学問を励み、五常の道備え候えば、天下の万民皆その徳に服して天子に心をよせ、自然と將軍も天下の政統を返上せられ候ように相成り候儀は必定」（廣橋兼胤公武御用日記）。

この史料は何か？ 兼胤の日記で、「八槐御記」ともよばれている。藤田覚によれば、この部分は竹内式部の垂加神道に基づく名分論である。それを式部が桃園天皇に説いたことを兼胤が書き留めたものだという。これを藤田は王政復古論としている（藤田『江戸時代の天皇』）。

右の「学問」とは何か？ 禁中並公家諸法度第一条に「天子諸芸能のこと第一御学問なり」とあるように、天皇が学問すること自体は、むしろ奨励されていた。

「五常の道」「徳」に万民が服する。これは仁政であり、学問は儒学ということになる。学問が儒学に尽きていれば問題ない。問題は天下に仁政を施す主体を將軍ではなく、天皇に求めている点である。

式部は徳大寺公城とんぼに仕えた。徳大寺家は静華家であり、公城は権大納言であつた。式部・公城は、天皇および近習たちと学問をしていた。それは、山崎闇斎の垂加神道で解釈された『日本書紀』の進講であつた。垂加の特徴は、『日本書紀』の神代を重視し、万世一系を強調するにある。これは、一方で、武家政権、徳川政権の相対化につながる。王政復古には律令制・国郡制の復古が伴うから、幕藩体制の批判・否定にもつながるのである。明治維新では律令制の復活が目指され、神祇官が太政官の上に置かれ、廃藩、そして国郡制ならぬ県郡制がしかれた。

明治維新の百年ほど前に、大政奉還・王政復古論が天皇に対して説かれていたわけだ。幕府からみれば、きわめて危険思想である。さればこそ幕府が介入し、宝暦事件が起こった。式部は追放刑、式部門人の八人の公家が官職を剥奪された上に永蟄居、一〇人の公家が遠慮を命じられた。

黒田俊雄がいうように、両部神道や山王一実神道は、本地垂迹説の立場に立ち、その意味で、神道は仏教から抜け出せない。これに対して、儒家神道である垂加神道は、社家神道とも近く、神道を仏教の影響下から引き剥がして、「神道」の語に、道教・仏教・儒教と対置される。日本の民族的宗教の名称」という意味が確立されるとともに、儒教の「道」の觀念の影響を受けて、政治的・道徳的規範としての「道」の意味が付与」される（黒田「神道」史研究の背景）。つまり、国学・復古神道による、イデオロギーとしての神道自立の道を開く。明和事件の山県大弐も垂加神道を学んでいた。最後の傍線部では大政委任論が説かれている。近世初期は池田光政に代表されるように、天道委任論が主流だった。天道委任論とは、天・天道が天下、および、天下の人民を將軍に預けたという統治委任論である。対して天皇が將軍に大政を預けるのが大政委任論で天皇が仁政主体

になれば、將軍は大政を返上するという。須田努は一九世紀にはいると、富国強兵論が台頭し、やがて強兵に特化することで「仁政」が死滅するという見通しを立てている（須田「江戸時代の政治思想・文化の特質」）。この見通しは的外れであるようにみえる。

たとえば、光格天皇は強烈な日本国主意識をもっていた。寛政一一年（一七九九）後桜町上皇からの教諭に次のように応えている。

「もつとも仰せの通り、人君は仁を本といたし候事……天下万民をのみ、慈悲仁恵に存じ候事、人君なる物の第一のおしえ、論語をはじめ、あらゆる書物に、皆々この道理を書きのべ候」（『歴代詔勅録』、藤田寛『幕末の天皇』）

一八世紀中後期に生まれた大政委任論は、一九世紀にはいると、天下に仁政を施すのは天皇なのか、將軍なのか、という問いで朝幕関係を鋭くし、仁政という政治文化へゲモニーの争奪戦が始まり、

両者は激しい鏖迫り合いを演じるようになる。

富国強兵の強兵は対外的なものである。それは欧米列強の外圧から「皇國」を守り、民衆を安んずる安民思想として、仁政に組み込まれる。私の見通しでは、仁政は死滅なぞせず、牧民思想と絡み合いながら、より「洗練」され、太平洋戦争まで強靱な生命力を保つ。

ここで、話を元にもどすと、……ああそうだ、オーロラの話。明和期の「王権」としての天皇の身体と、オーロラの関係は如何？ ということが気になるということであった。

※ ※ ※

呼びかけ人の軍師によれば「書物・出版と社会変容」誌は、あと四号、第三〇号で打ち止めという。一年二回発行。二〇号と二二号のあいだに二年間ブランクがあるので一足かけ一七年間に及ぶことになる。編集後記もあと四回。カウントダウンが始まった。（小川記）